

カメルーン・ヤウンデにおいてフランコフォンの若者たちが 実践するヒップホップ・カルチャーに関する研究 - アングロフォンが実践するヒップホップ・カルチャーとの比較から -

平成 17 年入
派遣先：カメルーン共和国
矢野原 佑史

キーワード：カメルーン、若者文化、ヒップホップ・カルチャー、フランコフォン/アングロフォン

対象とする問題の概要

アフリカ中西部に位置するカメルーン共和国は、元イギリス領土であった西カメルーンと、元フランス領土であった東カメルーンが統一される形で誕生した。その歴史は、現在においても、言語をはじめとした文化や教育システムに至るまで様々な点において差異を生んでいる。そして、マジョリティーであるフランコフォン（仏語話者）が政治・経済・メディアなどにおいて主導権を握るという現状も生み出している。

また、長年懸念され続けている高い失業率は、現代を生きる若者たちに将来への不安を与えている。特に、本研究で対象とするヒップホップ・ミュージシャンを志す若者たちは、生業として極めて成り立ちにくいミュージシャンという職業に対する夢と不安や、現実への不満が精神的に複雑に交差するという問題を抱えている。

研究目的

アフリカにおけるヒップホップ・カルチャーに関する研究では、製品化されたヒップホップ・ミュージックの歌詞を分析し、その内容と社会状況を照らし合わせる手法や、政治や社会の現状に対する若者の思想を考察する手法が主流である。一方、若者の思想や行動様式、また彼らが創造する文化を、彼らの日常を通して考察した研究は数少ない。本研究では、カメルーン・首都ヤウンデでヒップホップ・カルチャーを実践する若者らとともに、コンサートの準備や共演、並びにヒップホップ・ミュージックやプロモーション・ビデオの共同制作に携わり、日常をともにすることで彼らの思想や行動様式を読み解くことを目

的とする。また、前回の調査で焦点を当てたアングロフォン（英語話者）の若者たちとの比較から、アングロフォン/フランコフォン間の相違を考察し、現代カメルーンの若者が抱える葛藤や彼らの創造性、ひいては彼らの生き方そのものに対する理解を試みる。

フィールドワークから得られた知見について

まず、今回の調査では、ヒップホップ・カルチャーを実践するフランコフォンの若者たちと日常をともにすることにより、前回の調査で主眼を置いたアングロフォンの若者たちとの比較ができたことに大変意義があったと思う。フランコフォンのヒップホップ・ミュージシャンが国内音楽活動を行う上での状況は、CCF（フランス文化センター）による活動支援や、テレビ局やラジオ局などのメディアとの連携が整っており、アングロフォンのそれと比べて格段の差が生じていた。

前回のアングロフォン・ミュージシャンの調査において考察された、日常の彼らの言動とは異なる「楽曲/映像中における仮の自己演出性」においては、今回のフランコフォン・ミュージシャンの場合でも同様に見られた。その際、フランコフォンでありながら英語でラップする（歌う）者はアメリカで流行のヒップホップ・スタイルの影響を見せ、仏語でラップする（歌う）者はフランスで流行のヒップホップ・スタイルの影響を見せていた点が興味深かった。これは、フランコフォンの若者の間でも、ヒップホップ・カルチャーに対する思想や価値観の細分化が見られたということであり、その差異が彼らのライフ・ヒストリーの差異から読み解けるといふ知見が得られたことは、今回の調査中、もっとも大きな成果であったと思う。

また、実際にコンサートや楽曲/映像で共演することを通して、いかに彼らがそれを事前にイメージして備えるのか、自分たちで創造した楽曲をいかに観衆に向けてプレゼンタートするのかといったことが調査でき、各個人が、他の者と役割が重ならないように綿密に自分の立ち位置やキャラクターを思索し、他に埋もれない自己像を創造している姿勢が観察できた。

今後の展開・反省点

今回までの調査は、首都のヤウンデにおける若者が実践するヒップホップ・カルチャーや若者自体の理解に努めようとしたものであったが、これからは、カメルーン各地でみられるヒップホップ・カルチャーも視野に入れていきたい。さまざまな気候や文化、民族に溢れ、「ミニ・アフリカ」とも称されるカメルーンにおける若者たちの多様性や相違点などをヒップホップ・カルチャーを通して考察していこうと思う。



写真1.
フランコフォンのヒップホップ・ミュージシャンが集うスタジオにて
(レコーディングに参加しながら調査)



写真2.
プロモーション・ビデオ撮影風景
(撮影に参加しながら調査)



写真3.
出来上がったプロモーション・ビデオ (1)



写真4.
出来上がったプロモーション・ビデオ (2)